

看板レゾナンス

—断絶した3棟を結び、周囲と響き合う看板建築の再生—

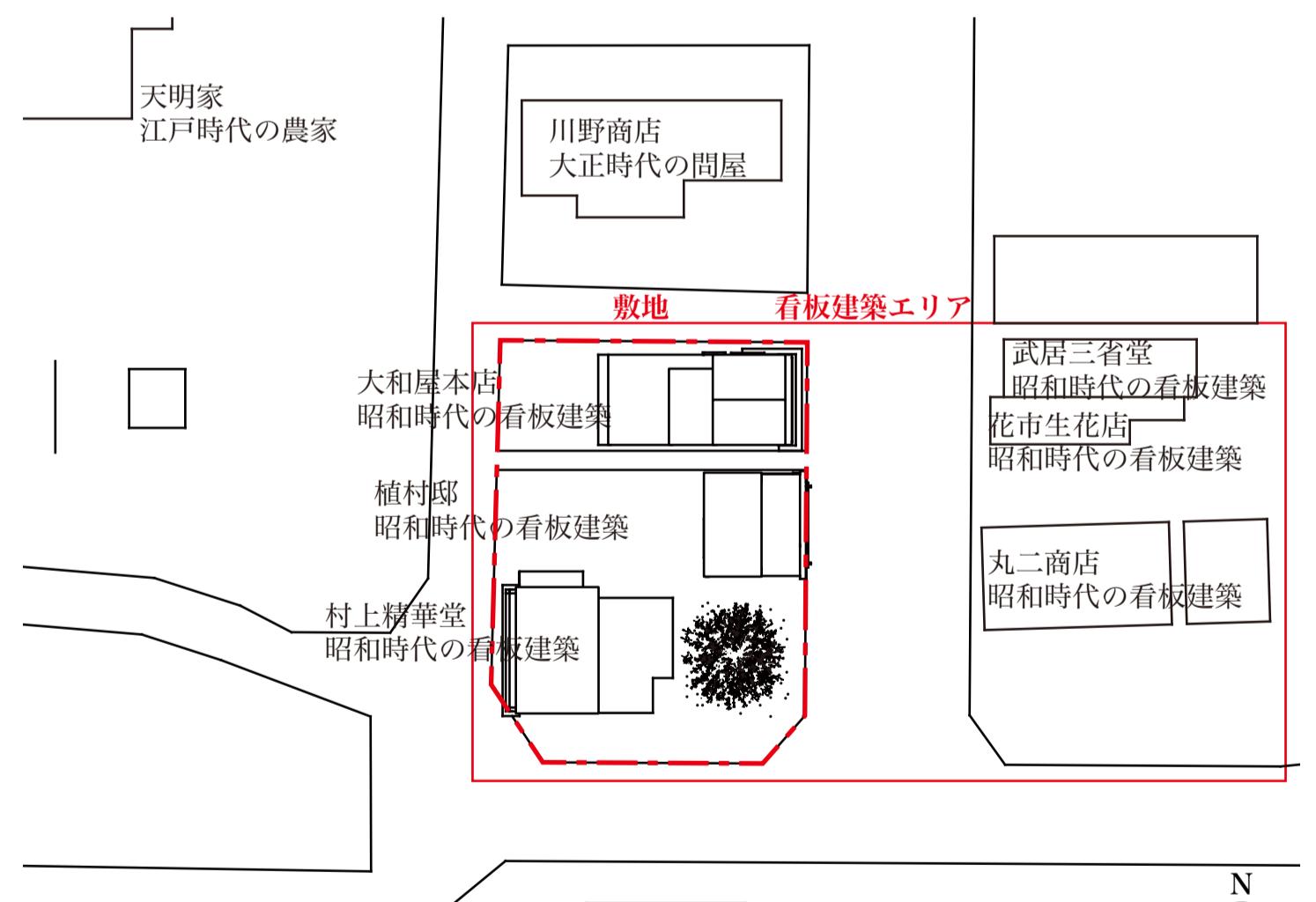


01 敷地・対象建物

課題は、東京都小金井市の江戸東京たてもの園に展示されている建物の中から任意の建物を選び、環境シミュレーションを活用したリノベーションを行うというものである。

私が着目した、江戸東京たてもの園の面白さ・特徴は、異なる場所で建てられた建築が全く脈絡のない土地に一堂に集められ、周辺環境と断絶している点にある。敷地を選ぶにあたり、この特徴が意匠面や環境面など様々な側面で良くも悪くも顕著に現れていると思われる、看板建築エリアの西側を選定した。

敷地内には北から順に、大和屋本店、小道を挟んで植村邸、村上精華堂が並んでいる。



大和屋本店

建築年代: 1928年 (昭和3)
旧所在地: 港区白金台四丁目
乾物屋 (鱈節・昆布など)



植村邸

建築年代: 1927年 (昭和2)
旧所在地: 港区白金台四丁目
貴金属類や時計を訪問販売していた



村上精華堂

建築年代: 1928年 (昭和3)
旧所在地: 中央区新富二丁目
化粧品屋

02 分析

■孤立した佇まい

元の環境と切り離されていても、再配置の仕方によって看板建築エリアの東西では趣が異なる。東側では武居三省堂と花市生花店が隙間なく並び、角地にあった丸二商店が道を彩ることで、寄せ集めでありながら昔から群をなしていたかのような佇まいを見せており、対して敷地である西側は、看板建築同士が絶妙な距離を持って再配置され、隠れていた側面のファサードが剥き出しになり、建物と無関係な外構が広がることで、孤立した佇まいとなっている。

西側



東側



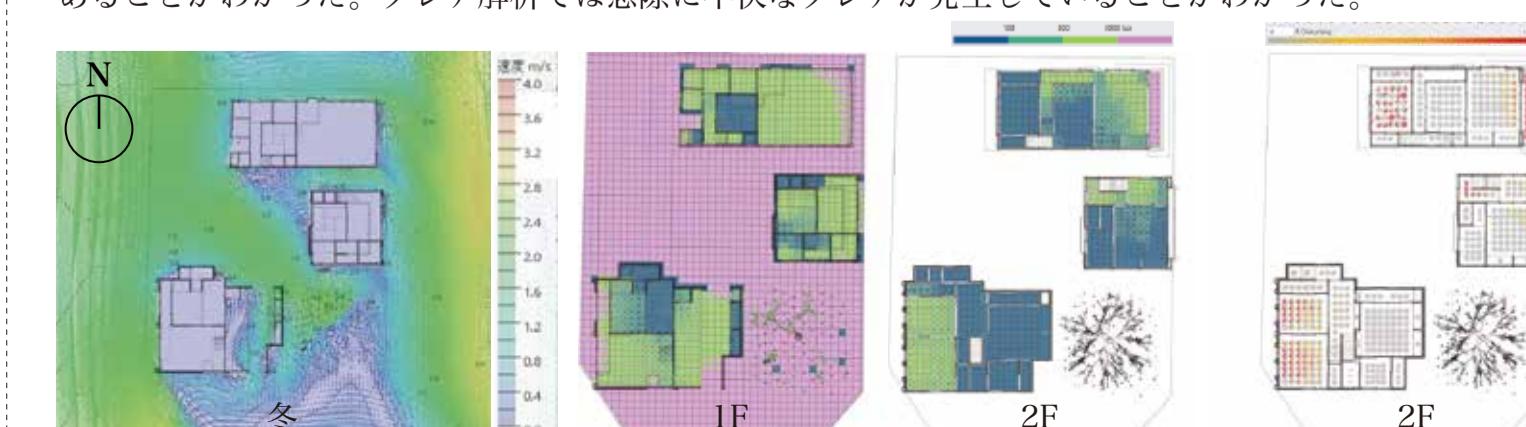
■1階のみで完結した内部空間体験

現在見学できるのは1階のみで、2・3階の内部空間は体験できない。各地から移築されたにもかかわらず、その集合性が十分に活かされず、看板建築が孤立した部分的な展示にとどまっている。2・3階を閉鎖している理由は、耐震性能が不十分であるためだと芸術家の方から伺った。また、外観では看板の存在感が際立つ一方、内部に入ると天井に遮られて看板を感じられず、その点に勿体無さを感じた。



■ギャップのある内外の環境

風解析では冬は北風が中庭に侵入することがわかった。UDI解析では屋外は人間が快適に過ごすには照度が高すぎることと、2階では後付けされた戸によって、照度が十分でなく、屋外と室内で極端な差があることがわかった。グレア解析では窓際に不快なグレアが発生していることがわかった。



03 提案

■3棟をつなぐ建築の挿入

過去の写真に見られるような群としての佇まいを参考し、3棟をつなぐことで一体的に見える空間を計画した。環境解析を用いた、建築内部を越えて広がる光や風のデザインにより、室内だけでなく屋外も滞在しやすい環境にすることで、3棟相互や周辺環境との新たな関係性を生み出すことを考えた。また、新築部分が耐震補強を兼ねることで、閉鎖されていた2・3階へのアクセスも可能にすることを考えた。

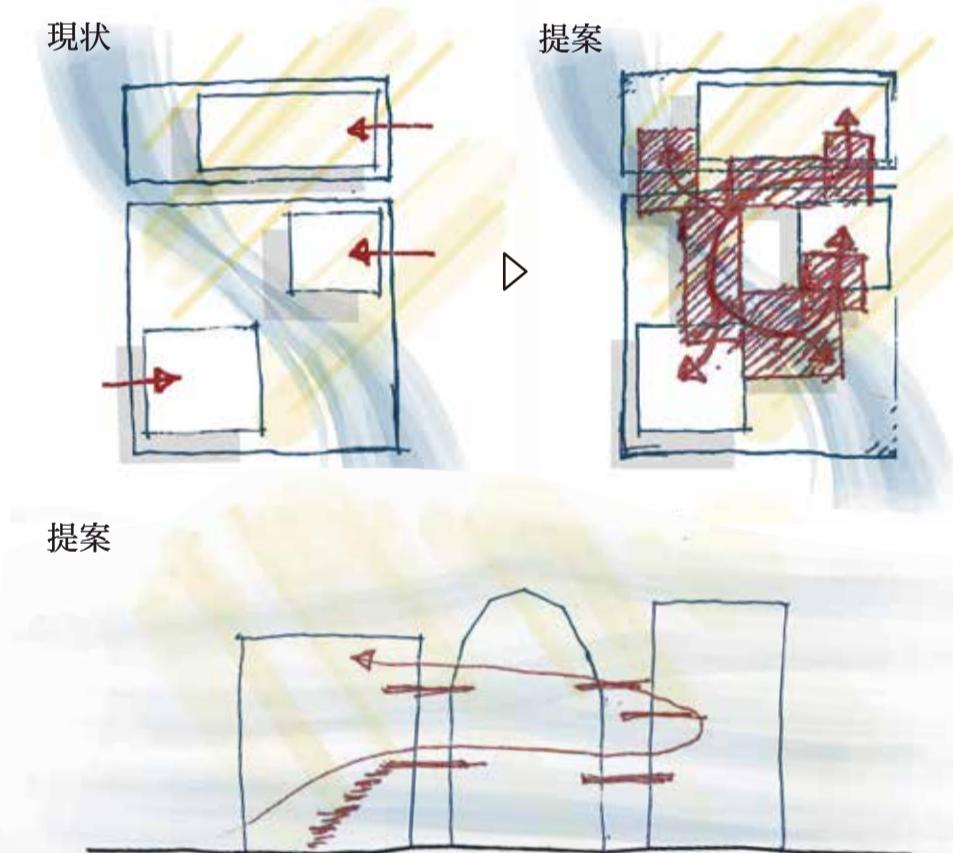
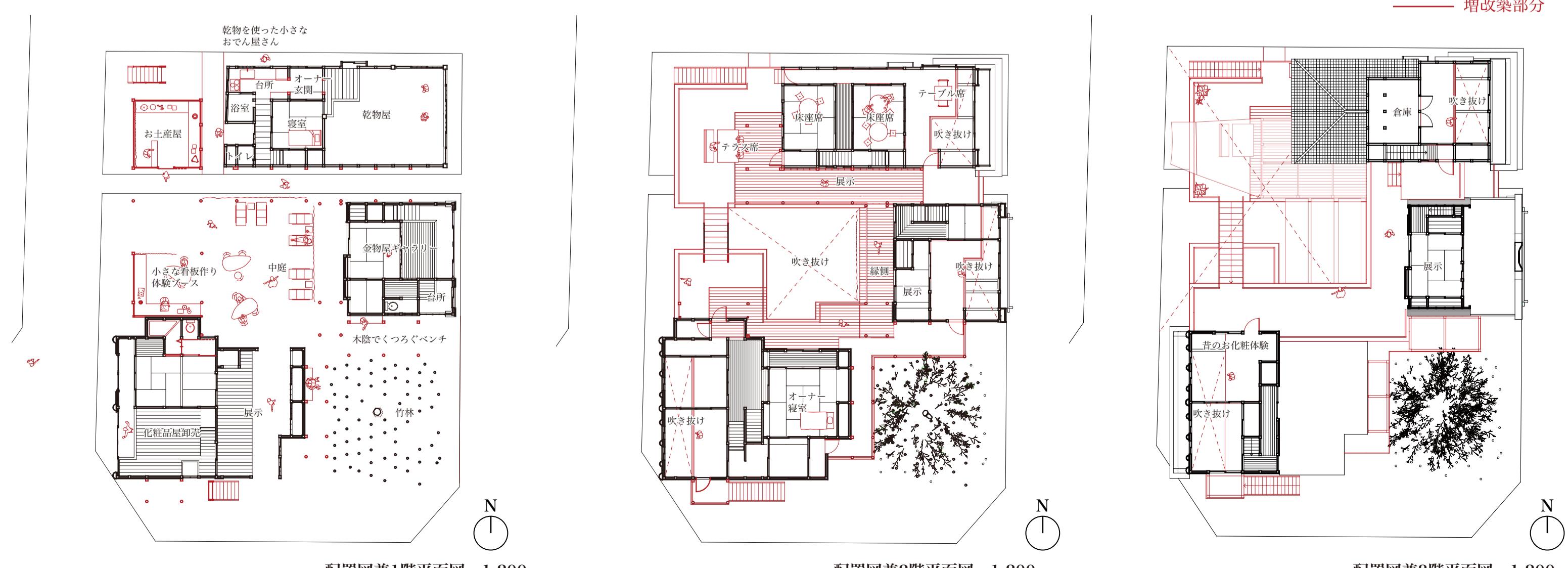
過去写真 (から引用)



看板建築が単体で存在しているよりも、群をなして一体となっているように見える。

■設計

既存用途を引き継ぎつつ、おでん屋さんや看板作り体験ブース、展示スペースなどを追加している。

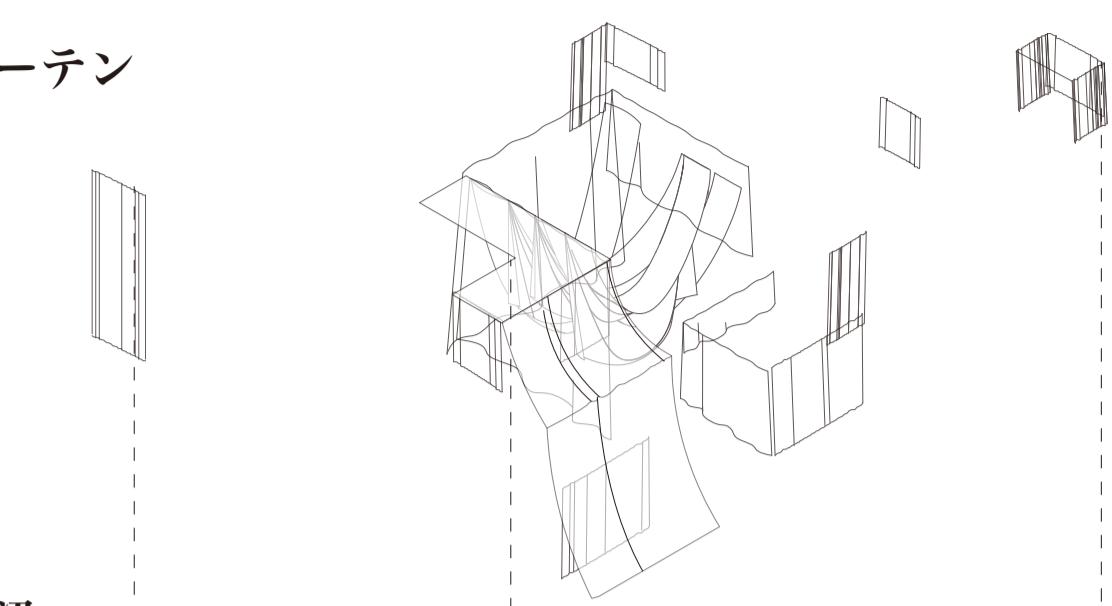


既存部分
増改築部分

04 素材・動線計画

既存を引き立てるため、白色鉄骨造を基調にウッドデッキやカーテン、家具を組み合わせて設計した。環境調節には既存の障子に代えて現代的なカーテンを用い、対比の中に調和を生み出している。さらに、ウッドデッキを設けて裸足で過ごせる室内の延長をつくり、既存内部を改修して靴のまま入れる領域を加えることで、新旧や内外が交差する中間的な空間を形成した。

カーテン

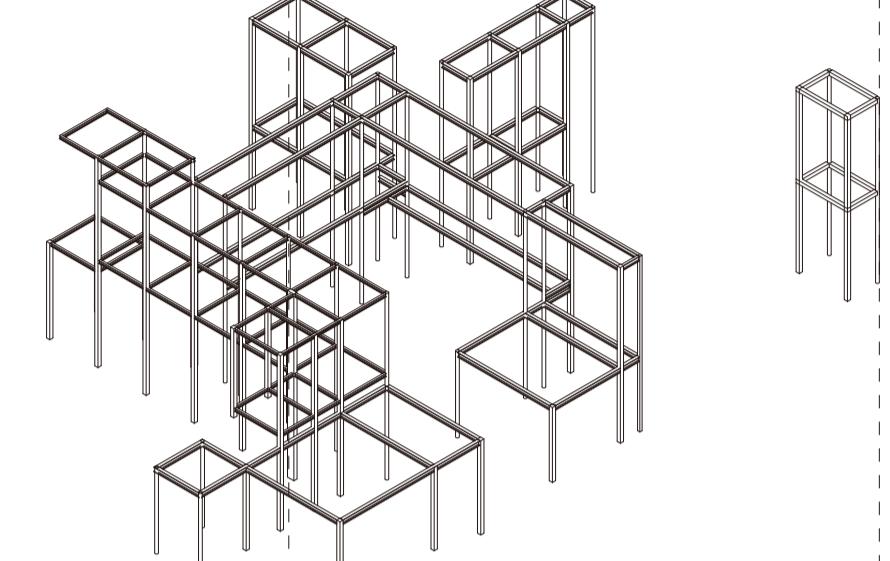


細やかな調節にはカーテンを用いる。

既存建築内部では、透過性のある障子紙の重なりによって奥行きが生まれているが、その奥行きを屋外にも展開していくことを考えた。

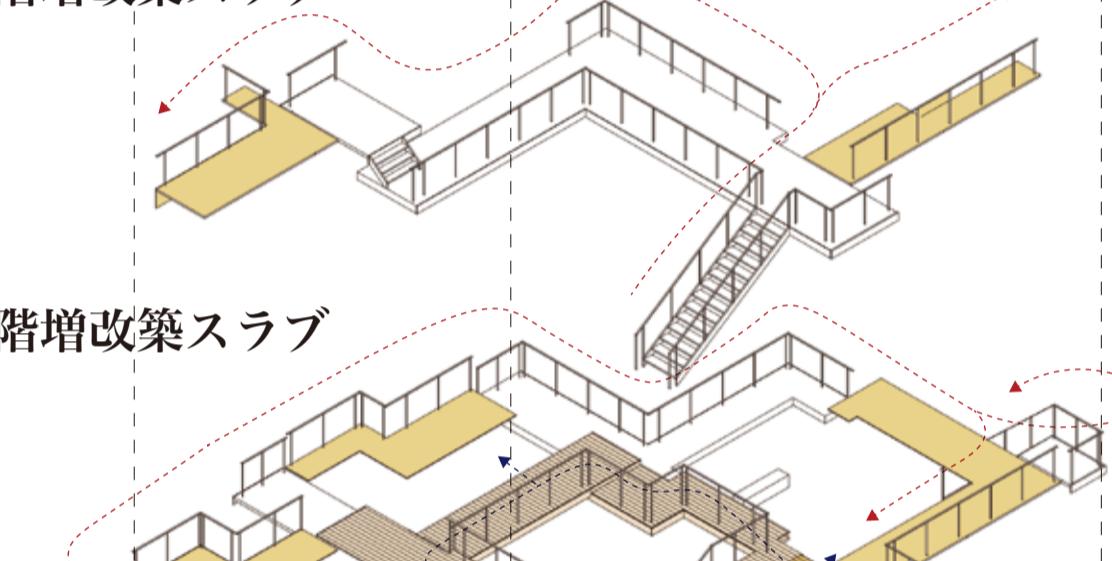
現代的なカーテンを用いることで既存との対比的調和を生み出している。

柱梁



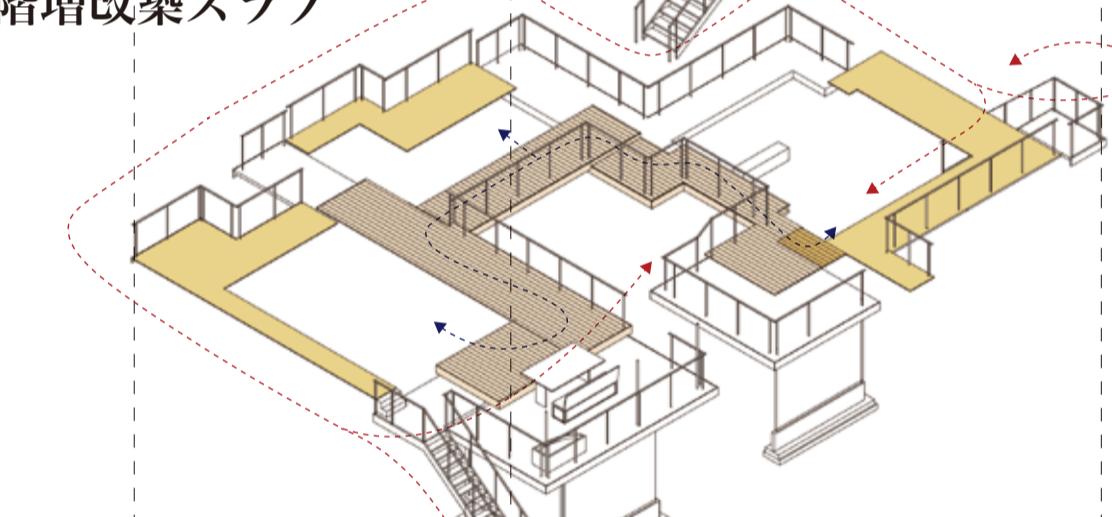
既存の耐震補強を兼ねて2・3階のアクセスを可能にすると共に、部分的に細い丸柱を用いることで、周囲の竹林に馴染んでいくような設計とした。

3階増改築スラブ



2階から連続して3棟を巡れる動線。スラブは下階の庇となる役割も果たす。

2階増改築スラブ



屋外から靴を履いたまま3棟を巡れる動線と建物内部から靴を脱いで3棟を巡れる動線の二つの回遊動線を設計。

既存看板建築



3棟の看板建築が距離をとって並んでいる。

既存建物内部

縁側

屋外動線

屋内動線



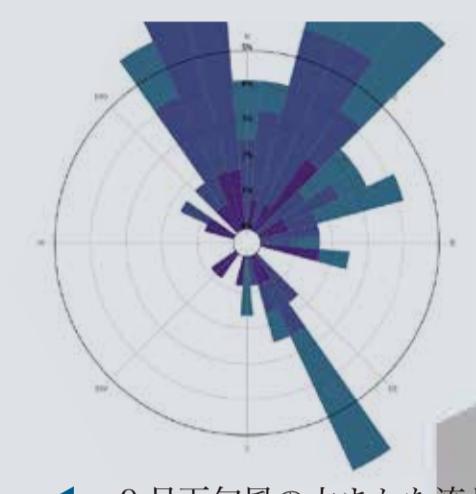
村土精華堂内部の様子

中庭の様子

植村邸吹き抜けの様子



中間期は窓を開け放つことで風が抜けていく。

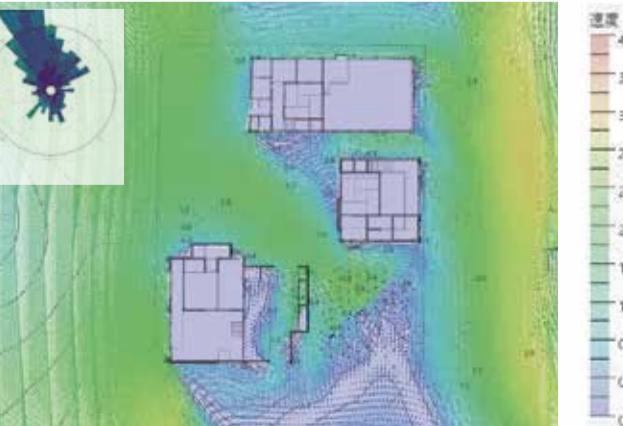
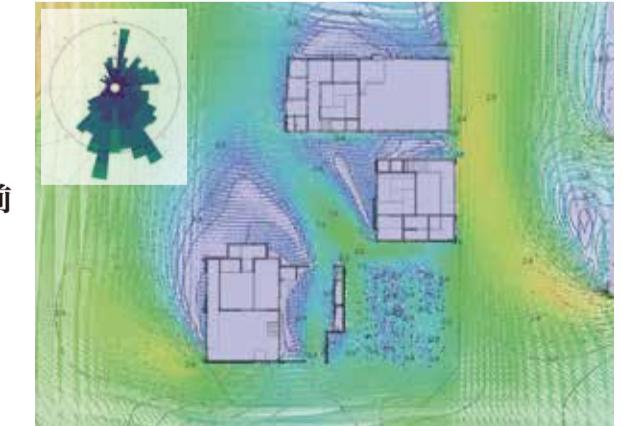


9月下旬風の大まかな流れ

内側からも看板を眺められる。

05 環境解析結果比較

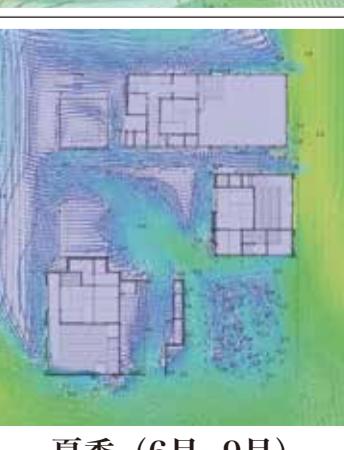
風解析結果比較



夏季は南東風、冬季は北西風が吹き、冬季の北風が中庭へ侵入している。

設計前

設計後

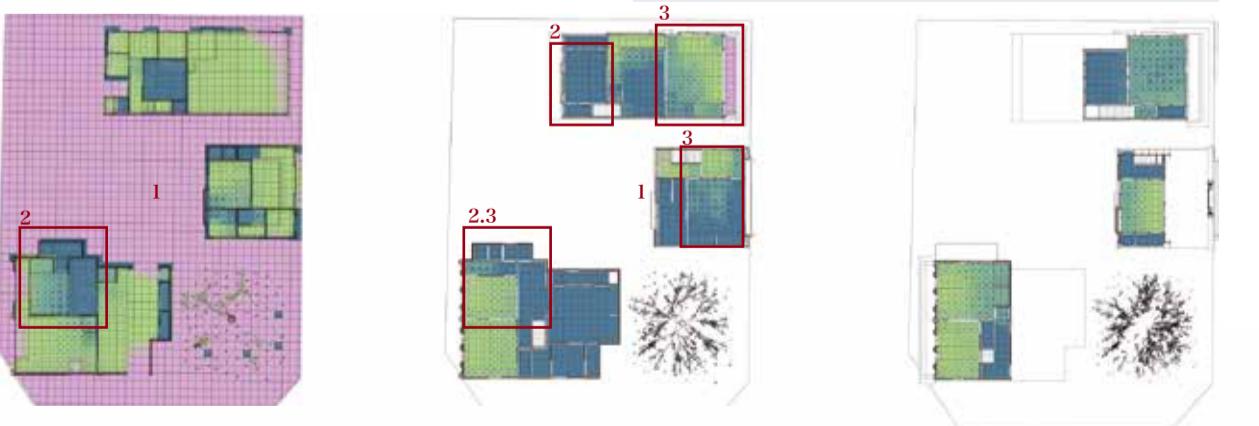


新築部分の配置を工夫し、夏季は現状の風通しを保ちながら、冬季には北風の侵入を防ぐ計画とした。

夏季 (6月-9月)

冬季 (12月-2月)

UDI解析結果比較



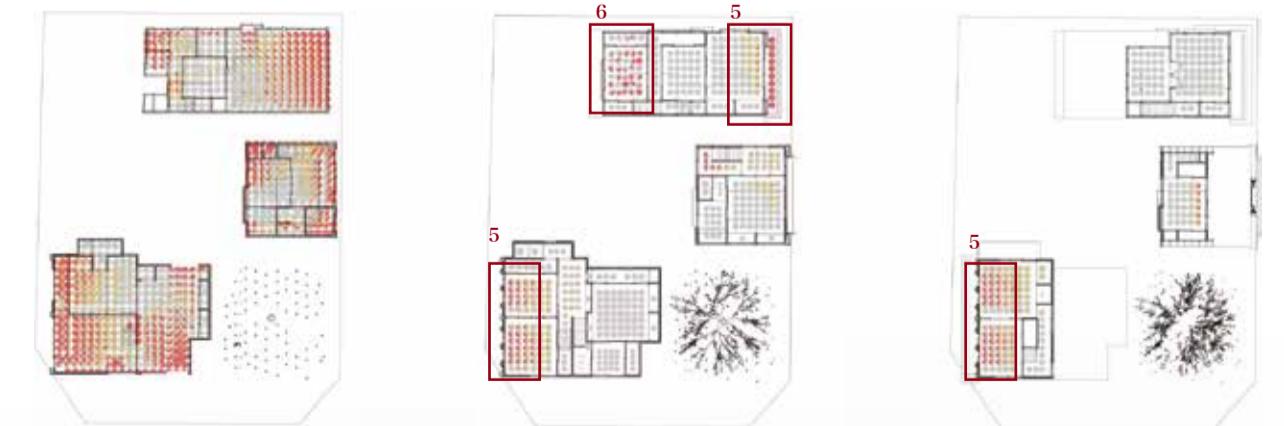
屋外は昼光のみで快適とされる300~3000 luxを大きく上回っている。
一方、室内では2・3階開口部に後付けされた戸の影響で100 luxを下回り、屋外との照度差が極端になっている。



1屋外では、3棟をつなぐスラブと屋外カーテンにより、中庭を中心にして300~3000 luxの範囲を生み出している。

2室内では、開口部に後付けされていた戸を撤去し既存の状態に戻すことでき通光を改善しつつ、新築部分を庇として活用して直射を遮り、緩やかな照度変化を実現している。
3吹き抜けにより、2階にも光が届いている。
また、設計後も室内で100luxを下回るエリアは寝室や展示室として活用している。

グレア解析結果比較



窓際では不快な眩しさが長時間感じられるエリアが生まれている。

また植村邸2階では後付けされた戸の隙間から光が入ることで不快な眩しさが生まれてしまっている。



5看板側に設けた吹き抜けによってグレアが発生していた部分がカットできている。

6室内では、開口部に後付けされていた戸を撤去と共に、新築部分を庇として活用することで直射を遮り、グレアを改善している。